


第5回報告

<p>テーマ</p>	<p>「ムラの守唄に込められた想い」 ～ギターと語り部～</p>	
<p>日時</p>	<p>平成 28 年 1 月 20 日（水曜日） 午後 1 時 30 分から午後 3 時 30 分まで</p>	
<p>場所</p>	<p>尼崎市立地域総合センター今北</p>	
<p>講師</p>	<p>花園大学非常勤講師 太田 恭治さん</p>	
<p>参加者</p>	<p>38人（内訳 登録者9人、市民他29人）</p>	
<p>事業の目的</p>	<p>被差別部落に残る守唄を通して、当時の子どもたちの生活や暮らしぶりを知り、部落問題解決に向けた人権意識を高めることを目的に実施しました。</p>	
<p>実施内容</p>	<p>ギター演奏での歌を挿入しながらの講演</p> <p>日本の子守唄の多くは、子どもをあやす唄ではなく、貧困の中で、子守り奉公に出ている10歳前後の守り子（多くは女の子）たちが、家を想い、つらさを紛らわすために歌詞をつけ歌った労働歌だという説明がありました。</p> <p>「竹田の子守唄」は、1971年に赤い鳥によって歌われ、大ヒットした曲ですが、この曲の元唄が京都の被差別部落で歌い継がれたものであり、歌詞の中に地名等も入っているため、数年後放送が自粛されました。16年前から支部女性部で復活の取組をし、毎年啓発活動として取り組んでいるという説明がありました。</p> <p>続いて、尼崎の部落に伝わる守唄を紹介されました。「竹田の子守唄」など他の部落の守唄と共通しているのは、テンポがあり、このテンポは、赤ん坊をおぶってあやす時のテンポであり、また、生活観にあふれた歌詞であるとのことでした。</p> <p>また、講師は、年々若者は部落問題の認識が薄れており、知らない方が部落差別はなくなるという考えが増えていることを指摘され、そうした若者も、インターネットなどの情報から、部落に対するマイナスイメージだけ持っており、部落問題を解決するためには、教えていくことが大事だとのことでした。</p>	

<p>参加者からの感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歌の本当の意味がやっとわかった ・ 話がおもしろい。 ・ 内容がよくわかりました ・ 子守唄と守唄のちがいがよくわかった
<p>成果</p>	<p>参加者のアンケートにも、参加したきっかけとして、内容（テーマ）に興味があったという方が多くあり、また、講師も実際にギターをひきながら歌い、面白く説明をするという講演だったので、参加者は部落問題についてよく理解できたと思います。</p>
<p>その他</p>	<p><u>参加された皆さんへ</u></p> <p>講師からの説明がありませんでしたが、当日資料の「東今北の守唄」2番の歌詞に「 のやっこ何喰て肥えた カエルの日干しトカゲの汁で 皆でかっこめかっこめ」とありますが、 は周辺地区の地名で、実際に食べていたのではなく、「毎日、子守りをしなければならぬ自分たちの生活に比べて、自由に遊び、日暮れになるとさっさと夕食を食べることのできる周辺の一般地区の子どもに対する悔しさと、日頃自分達を差別し続けてきた周辺地区への精一杯の抵抗の気持ちが込められた歌であろう。」との解説が『尼崎部落解放史 本編』にありますので、ご紹介しておきます。</p>